

# 男が男を生む

——イニシエーションとジェンダーの研究——

藤崎康彦

## 1 はじめに

通過儀礼のうち、社会的地位や身分の変更を公的に、あるいは共同体で、印付ける儀礼を特にイニシエーション（地位や身分の取得は、ある集団に加入することを実際上意味するので、加入礼あるいは入社式とも訳される）という。この中には成人儀礼（英語では多く *puberty rite* と表現され、成熟儀礼と訳すこともある）が含まれる。成人儀礼はその社会で大人になる、一人前になることを印付け、祝うものであると理解されがちであるが、基本的にはその社会の男、あるいは女になることに関するものである。その意味では、共同体での成人儀礼がなぜ男に多くて、女には少ないか、ということは不思議に思わざるを得ない。またそれは、以下の考察においても触れるが、女性の地位を巡る人類学的思考の関

心に含まれるものでもある。

女の場合には身体的成熟、すなわち子供を産むことができる状態になったことが何よりの関心の焦点になることが特徴的で、それを印付ける場合も家族や親族のように（地域共同体ではない）むしろ私的な集団の範囲で儀礼を行うことが、多くの社会で普通のようなものである。従って、それぞれの社会は公的な関心事としては、（少年たちが）男になることに特に関心を寄せていると理解せざるを得ない。つまり、男と女の通過儀礼は対称的なものではないようにみえる。そしてそれはそのまま、男女の地位の理解に反映してくるであろう。

しかし、これは近代以前の伝統的社会での話である。いまの市町村など行政主権の「成人式」のみをみれば、儀式は男女にとって同じ意味があると思えないだろう。そして近代社会の市民

(citizen)としての地位を確認するというのであれば、それでよいことは明らかである。しかしそうであればこそ、多くの伝統的社會におけるこの非対称性は、現在の我々にも影響を持つかもしれないものとして、適切に理解すべき特別な課題となるであろう。

本稿は、日本の民俗社会における一つの成人儀礼を取り上げ、その儀礼の構造と意味の分析を通して、伝統的社會の男女についての思考を確かめてみることを目的とする。具体的な資料として、福島県の「幡祭り（はたまつり）」を紹介する。私がこの祭りを知ったのは、かつてNHKが「ふるさと伝承」シリーズとして記録した映像によってである。初めてみたとき、人類学のイニシエーション研究の観点から、大層よくできた祭あるいは儀礼であると感じ、ほとんど感動したことをいまも覚えている。

従来から文化人類学のテーマとして通過儀礼やジェンダーに関心を抱いていたが、筆者が本年度から本学で初めて開講された「男性学」を担当していることもきっかけとなって、文化の中で「男とはどのようなものと表象されているか」を考えてみる機会が改めて得られた。もちろん現在の「男性学」の課題についての普通の理解は、近代社會のジェンダー的構造の脈絡から「男性問題」として認識されるような現象を考察することであろうが、私はもう少し広く考えてみたいと思っている。そこで、「幡祭り」のような具体的な儀礼を手掛かりに、男にまつわる諸觀念の文化的構築にまで男性学の思考をひろげ、その一部を仮説的な考察として提

示したい。

## 2 資料

この祭は、放送では「若者が生まれ変わる山」福島県東和町の「幡祭り」として一九九七年五月一日にNHK教育テレビで放映された。以下は放映された映像プログラム（以下「ビデオ」とする）の簡単な音声スクリプトに主として映像からの最低限の補足をカッコに入れて表記したものである。

なお、「幡祭り」を歴史的、民俗学的に考察するなら、歴史文書と経験者や当事者からの聞き取りなどの調査資料が、より信頼性の高いものになる。今回も東和町教育委員会の報告書は参照した。それに従って以下のスクリプトに詳細な注を付けることはできる。しかし最初の印象あるいはむしろ感動は、ビデオの映像を通して得たものである。今回はあえてビデオを第一次的な分析資料にして考えてみたい。分析で必要な範囲で報告書は引用する。

「幡祭り」の場所は福島県東和町小幡（こはた）である。映像で見る限り平野の集落ではなく、山間の村である。現在は福島県二本松市木幡となっている。二本松市のホームページでは木幡のある東和地区は市の東部に属し「東部の阿武隈地域は、阿武隈山系の北部に位置し、最も高い山は日山（一〇五七m）であり、全体に丘陵状の起伏の多い地形」であるとされている。また「木幡山

は海拔六六六m阿武隈高原の北辺に近く」に位置している。

なお、この幡祭りとは二〇〇四年に国の重要無形文化財に指定されたそうである。現在は二本松市のホームページで紹介され、市の観光資源となっているようだ。由来についてのより詳しい記述は東和町教育委員会の報告書にあるが、議論の本筋に関わらないのでここでは省く。

### ビデオ・スクリプト

小幡には集落地区の近くに小幡山（こはたやま）があり、そこには守り神がいると信じられている。守り神は農作物を見守り、若者の成人を見届けてきた。一月の末に「幡祭り」がある。五穀豊穡を祈るとともに、「くぐり岩」で地区の男子の成人儀礼が行われる。くぐり岩の狭い穴から生まれ変わり、一人前の男となる。くぐり岩は村の一員を産み落とす「胎内」となる。

「権立（ごんだち）」とは成人として認められる儀式を行う若者のことを言う。今回の儀礼対象者の一人、折越集落の斎藤氏は二三歳である。権立は女性の長襦袢を身につける。斎藤氏は母親の（赤色の）長襦袢をつけた。

昭和三〇年頃までは中学を卒業したばかりの少年が成人と認められる儀礼であったが、今は二十歳前後の青年が地域を担う一員として認められる儀式となった。

一二月一日の「幡祭り」当日は九年ぶりの雪の祭となった。集

落ごとに行列（幡行列）に参加する男達の身支度が行われる。「幡祭り」の趣旨とは集落ごとに羽山神社に「幡」（幟幡）を奉納することである。その中に「権立」の「胎内くぐり」と「権立よばり」が組み込まれている。「胎内くぐり」儀礼の舞台である「くぐり岩」は神社の下にある。権立は「太刀」を身につける。「太刀」はこぶしの木を削って、男根をかたどって作る。斎藤氏の場合は父親が作った。一人前の男になることを象徴していると考えられている。

集落ごとの氏神に祈願し、全体の集落場所に向かう。今回の権立は六人で、全員二十歳前後の若者である。その後、奉納幡を押し立てて行列を作り、小幡山に向かう。奉納幡は五反幡、三反幡がおおよそ七十本、その他小さな幡合わせて合計百本以上であった。

権立以外の参詣者はなだらかな本道を歩む。これは林道である。権立は、付き添いの「先達」（祭司、あるいは祭り役人の役割の男達。着物と裁着袴のような袴をつけ、袖口や裾口は結んで閉じてある白装束で、被り物をしている。修験者を表わしているものと思われる）の大人とともに裏参道を通って登る。成人とみなされない権立は急な坂道のつらさを体験するものとされる。約四十分の登りである。

「くぐり岩」（かなり急な山腹にある）につくと権立は太刀を奉納する。岩の前にはこれまで奉納された太刀が山積みになっている。次に一人ずつくぐり岩の七十七センチメートルほどの穴を（上から下に）くぐって、出てくる。これを「胎内くぐり」という。その

とき権立はそれぞれ口に百円硬貨をくわえて出てくる。穴を通じて出てくると同時に硬貨を地面に落とす。(と同時にそれをすぐ拾い上げる。)

それから、岩の上下に立つ「先達」(山岳修験者のように長い棒を持つている)が問答をする。(これを「権立よばり」という。)

問いかげ(総大将、岩の上)：「当年の、当年の生いた御殿(こでん)は名は何と申す。」

答え(岩の下の先達)：「向山(むかいやま)の木の根っこ申す。」  
問いかげ(総大将)：「いやいやそうではない。そうではない。

当年の生いた御殿は名は何と申す。」

答え：「八幡太郎と申す。」

一同(「権立」以外の「先達」たち)：「オー、生まれたぞー。」

(同時に法螺貝が吹き鳴らされる。これは実際の法螺貝ではなく、桐の木を削り貫いて、吹き口を付けて作ったもの。)

(それから一同は「くぐり岩」の少し上の山腹にある羽山神社に行く。羽山神社の下に小屋がある。小屋から役人の装束ではない普段の服の初老の)男性が重に詰めた赤飯と箸をもって現れ、並んだ若者の手のひらに一箸ずつおいてゆく。若者は手から食べる。これは「乳粥(ちちがゆ)」といわれ、かつては小豆粥が与えられていた代わりである。この儀礼は「食い初め」といわれている。若者は乳代として先ほどの百円硬貨を納める。(百円を男性に直接手渡す。)

### 3 分析

通過儀礼としてよくできた象徴的な、かつかなり普遍的な構造を持つ例である。先ずファン・ヘネップの図式に従って、全体を「分離」、「過渡(移行)」、「統合」の三つの部分(儀礼)に分けることができる。「分離」は身支度をして集会場所に参集し、裏参道を登るところまでとしてみる。「過渡」はこのビデオの中心部分である「胎内くぐり」と「権立よばり」であろう。「統合」に相当する部分はこのビデオには表現されていないが、くぐり岩の上の羽山神社への参詣がそれに相当すると思われる(c.f. 東和町教育委員会二〇〇一、以下東和町と略記する)。また下山した後の「集落ごと」の氏神への報告や、その後の例えば集会所などでの直会も行う集落があるので、それも「統合」の儀礼に含めて考えることができるであろう。

次にポイントごとに詳しく考えてみる。

#### ①男女両性具有の状態になる。

「権立」は女性の赤い長襦袢を着て、裁着袴を穿き、禪をしている。足下は足袋、草鞋である。映像では実際にはゴム長靴の人もいる。かつ男根を刀のように身に帯びている。大きな太い木で削

り出したもので重いので、布の紐を肩から袈裟懸けに回して右腰の脇で支えている。男でもあり、女でもある姿は、日常の秩序あるいは分類から離れた曖昧な姿であり、ターナーのいうリミナリティー（日常生活の分類秩序やそれに基づく規範から逸脱し、境界状態にある人間の曖昧で不確定な状況）そのものを表現している。長襦袢を身につけるからといって異性装と考えるべきではない。女でもない、男でもない状態であり、そこから男が分離・析出してくるいわば始原の姿を示していると考えるべきであろう。

## ② 「村」人のやることはできない。

イニシエーションにおいてはしばしば加入者に危険や苦痛を与えて試練を課す場合がある。それは多くは「過渡」の儀礼の実質的な内容の一部を構成している。他には秘儀的知識の開示・伝達となされることも多い。このビデオの音声スクリプトでは裏参道を通って山に登ることを「成人とみなされない権立は急な坂道のつらさを体験するものとされる」として、試練として解釈している。これは現地のひとの解釈を反映した説明であるようだ（東和町・83）。しかし、確かに急なかつ狭い登りにくそうな道ではあるが、この年頃の若者に試練と感じられるようなものとも思えない<sup>(3)</sup>。イニシエーションを受ける人とその他の人たちを記号的に分ける仕掛けであると感じる。むしろ、試練は講での権立としての働さに見いだせるかもしれない<sup>(4)</sup>。

## ③ 「男（の子）の誕生」を表現する。

岩に割れ目のある（大きな岩に小さな岩が寄りかかるように向かい合っている。その二つの岩が間に狭い隙間を作り出している）「くぐり岩」を通る「胎内くぐり」は、出産の比喩として極めて分かりやすい。イニシエーションでは、苦しい試練などを通じて子供としては死に、大人（若者）として再生する「死と再生」が象徴的に表現されていると普通はいわれている。しかし、前項②で、試練の意味は少ないと考えた。つまり「死」のニュアンスはそれほど鮮明に感じない。

ここは、男というより「男の子」の誕生が演じられていると思わざるを得ない。この後にその成長が儀礼的に演じられるからである。このような誕生と成長の表現は「村人」の誕生と成長を意味していると考えべきことは、ここだけでは断定が難しく、民俗誌の参照が必要になる。それは今後の課題であろう。しかし、ここでの範囲の印象を記せば、新たな生み直しとするなら、現実の存在としての（女が生む）「男の子」と観念的な存在としての「若者」、「村」人とは質的に異なるものと表象されているのだと思わざるを得ない。そこに断絶があるのだ。連続性の中に通過儀礼で不連続を導入する、つまり子供から若者へ社会的地位を変えていくというより、全く別のものをここで新たに生み出すと考えられていると私は感じた。それを男がやるのだ。

④「人(村人)」としての認知を「名づけ」によって行う。

多くの社会で、名付けは一つの人格の認知として大事な行為であることは共通に認識されている。この儀礼でも、「くぐり岩」から出てきた者(生まれたばかりの男の子)に対して、名を問う問答がなされる。これを「権立よばり」という。最初は「向山の木の根っこ」というように、まさに取るに足りない、何者でもないかのごとくの名乗りがなされる。しかし、問いかける者によってそれは否定され、改めて「八幡太郎」との名乗りがなされる<sup>55</sup>。そのとき立ち会う「先達」が「生まれたぞー」と一斉に声を上げる。ビデオを見ても感動的な場面である。ここで、立派な名が付けれられ人格が認められた、すなわちここで生まれ出て、村人として晴れて認められたことを意味する。

⑤「人(村人)」としての成長を表現する儀礼的行為を行う。

この問答の後「乳粥」といわれる赤飯を食べる。神社の堂守の小屋のようなどころから男性が赤飯を持って現れて食べさせる。この小屋を「粥小屋」という。「食い初め」といわれているように、生まれた男の子の成長を模している。そのとき先ほどの百円硬貨を渡す<sup>6</sup>。その後くぐり岩の上にある羽山神社に参拝する。村人として初めて神に参拝することになる。この部分はビデオでは表現されていない。映像としては省かれたものようだが、通過儀礼

の構造としては、「統合」の儀礼に相当すると考えることができる。なお、この羽山神社での権立の参拝は現在は、先ず神社に背を向けて行う「背拝み」、次に神社に向かって左側を向いて拝む「横拝み」、最後に正面を向いて(普通に)拝むが、地域によっては、また時代的に昔はそうではなかったらしい。かつては一年目は「背拝み」、二年目は「横拝み」、三年目によく普通に正面を向いて拝むことが許されたとのことである(東和町・88)。これは、村人としての成長、すなわち村組織への統合が、時間をかけて徐々に行われることを表現していると理解できる。

⑥女はこの儀礼から排除されている。

この儀礼の中で、一番興味深いことがこの点である。女性の排除というとき、この場合意味は二つ成り立つ。一つはこの成人儀礼の関与者は「権立」も「先達」も男性だけであるという意味で、女性が排除されていることである。「幡祭り」の場合、山岳修験の影響が想定されている。事実この羽山神社は「羽山籠り」の場であるが、この「羽山籠り」は女人禁制である(東和町・61―62)。山岳修験でなくとも、公的な宗教儀礼は男達の管掌であることが普通である。むしろ多くの社会でこれはほとんど普遍的で、女も参加できるものは少なく、ましてや女だけが参加して男が排除されている祭り(例えば沖繩久高島のイザイホーなど)は例外的である。その点ではこの幡祭りはごく普通の儀礼の性格を示している。

るだけであるということもできる。もう一つは女(娘)に対してこれに相当する公的な成人儀礼が行われることがない、という意味である。

しかし、さらにユニークなのはその儀礼の中身が、「男を」生み出す」ことである点である。つまり、文化人類学の、そして私の男性学の議論の脈絡で言うならば、「男たちだけで、(改めて)村人を生み出す(誕生させる)」ことが象徴的に演じられていることこそが、注目すべき価値のある点である。おそらく「村人」とは男のことと当然のように観念されているのであろう。

#### 4 考察

幡祭りの通過儀礼としての象徴的な構造の分析は、以上で主要な論点は網羅することができると思われる。民俗学的、あるいは文化人類学的には、これらの諸点を例えば現地フィールドワークなどで研究することも興味深いであろうし、必須のことではあろう。例えば娘の成人儀礼が地域共同体レベルで行われていないことは、念のため確かめておく必要があるだろう。しかし、ここでは敢えてその不在を前提にして議論する。この地域の儀礼そのものについてではなく、むしろもう少し普遍的な文化観念に関心を転じたい。すなわち、以上のような特徴のうち、最後の⑥女性の排除に焦点を当てて、男性学的な観念も含めて考えてみたい。

女性の排除という表現をすると、一般的な女性差別の意識や女性を劣位に置く社会制度の存在を想定して誤解されるかもしれないが、その点でフェミニスト人類学者シェリー・オートナーの指摘をここで考え合わせることは、議論を深めるのに有益である。オートナーの根本的な問題意識は、女性の男性に対する社会的劣位、あるいは従属的地位が普遍的であるのにはなにかゆえか、である。仮説として、彼女はほとんどあらゆる文化で、女性は男性より「自然」に近いと表象されていることに関係があるのではないかと想定する。これまで男性・女性Ⅱ文化・自然という二項対立の関係が多く研究者に想定されていたのであるが、それをより精密に考察したのである。なぜ女性が(いわば比喩的に)「自然」により近い存在とみなされるかは、女性の現実的条件が普通の意味での「自然」に女性を縛り付けていることから説明できると考える。それらは①子を産むことに関係した生理的構造の制約、②家庭における子供の第一次的社会化の担い手であること、③家庭生活を媒介にして形成される女性特有の具象的、主観的な精神構造などである。これらは女性を男性よりも「自然」に近い存在と表象させる原因となるのだが、もちろん女性も文化的存在であることは明らかなることである。従ってむしろ、女性は「文化」と「自然」の間にある中間的位置を占めていとみなすのが、より適切な理解であろうと指摘する。中間的地位とは、やはり多層的な意味の概念で、①「文化」と「自然」の連続的位階構造での「中途」の

位置、②宇宙における根本的に異なった過程と観念される「自然」と「文化」を媒介する位置あるいは機能、③「文化」と「自然」を区切る境界に近い位置（中心と周縁という時の周縁的位置）の三つの意味が区別できるとする。

オートナーは女性が「自然」に近い、つまり「自然」と「文化」の中間的位置に（それぞれの文化表象の中で）位置づけられているという事実は普遍的だと指摘したのだが、このような認識からの彼女のフェミニストとしての主張は次のようなものである。女性を「自然」に近いものとする文化的構築と、女性の置かれている現実の社会的（従属性という）状況は相互に強化しあっている。従って、女性の状況を改善するのに社会制度の改革のみを目指す努力では十分ではなく、また同様女性を劣位に置く文化的前提の変革のみを目指す努力でも不十分で、この双方を視野に入れる必要性を指摘する。

オートナーの説明は明快で、説得的ではあるが、彼女の考え方が自らが西欧文化の偏見を背景に持っているということができるかもしれない。例えば、子供は文化的存在ではなく（むしろ自然的存在で）しつけと教育で人間になるべく社会化、文化化されなければならぬと当然のごとく前提している。そして、女性であることは出産の生理によって「自然」に近いものとされ、そのことで当然に不利益を被るものと想定している。子を産む力は女性にとつては桎梏と感ぜられているかのようである。

ところが世界の儀礼の中には、男達は必ずしも女性の出産能力をそのようにはみておらず、むしろ羨んでいるのではないかと思われるようなものもある。そもそも子どもは女性しか生むことができない。生物学的にいえば、男性は遺伝子の「運び手」（福岡二〇〇八）であり、一時的、周辺的な意味しか持たない。受精の時に必要なだけである。生殖（とその後の子育て）における女性の充実した、実質的な貢献から比べれば、男性の役割はほとんど空虚としかいいようがない。一時の役割以外には男の存在理由は（生物学的には）希薄なのである。男性たちがこの点を極めて遺憾に思っていると解釈される、あるいは女性の生殖力を嫉ましく思つて、それに関与しようとしているのではないかとすら思える現象が、人類学の資料にはいくつもある。例えば女性の生理を真似るかのようなペニスの下部切開（cf. ベッテルハイム）や、妻の出産の際に分娩の苦しみを夫が演じるクバード（擬娩）などの習慣である。さらに、多くの社会には時期が来ると女（母）たちから男の子たちを引き離して（奪つて）男たちだけの集団に組み入れる制度がある。例えばアフリカのマサイ族の若者には「モラン」という戦士階梯があるが、長老（男のみである）達がそこへの加入儀礼を若者に対して行う。幼いうちは仕方がないが、ある程度大きくなったら男の子を男達の手で奪還したいという願望の現われとも思える。

つまり、幡祭りには男達が男達だけで男を改めて生み出す儀礼と



みなすことができるのだが、その文化的動機は何らかの形で確かめてみる必要があることだ。例えば、女は子を生む故に「自然」に近く、それ故に社会的に劣位に位置づける。そういう劣位にある女に男（若者）を任せておくことはできない。そういう意味で、若者を男にしっかり関係づけるという目的で儀礼を行うのであるかもしれない。今回の資料のビデオには、この儀礼の外の事柄であるからか表現されていないが、この儀礼の後「権立」達はその地域の若者組に加入するのであれば、つまりこの儀礼が若者組への加入礼でもあれば、こういう想定も成り立つ。

しかしそういう男性優位の発想は、ビデオを見ていても何か実感としてそぐわないのである。むしろ女性の生殖力を評価し羨むが故に、（村人にするためには）男も（女と同等に）男を改めて生み直さなければならぬと考えているのかもしれないとする方が、まだしも落ち着きよく感じられる。つまり、生物としての男性（男児）は女が生むが、「村人である」男は男が生まなくてはならない」といつているかのようである点が興味深いのである。

## 5 おわりに

本稿では、映像に主として依存する儀礼分析を試みた。その結果、「幡祭り」の中の「胎内くぐり」や「権立よばり」は「男が男を生み出す儀礼」であるように見えると指摘した。その社会の人

のカテゴリや概念とジェンダー観が関連していると思われる。ジェンダーについてはオートナーが属する西欧文化と、日本の民俗社会のようなそれ以外の文化とでは、基本的なジェンダー観において差があるかもしれない。そして、それをみるためにはやはりその文化ごとの「人」の概念や分類を知る必要があると思われる。そのときの手掛かりの一つが通過儀礼であるのだが、当然それだけでは終わらず、広くその文化全体の研究が要請されるであろう。今後の課題として、今回対象にした儀礼についていえば、修験の影響を中心に母体となる民俗社会の全体的理解が必要であろう。しかし、私はむしろジェンダー人類学の脈絡から、他の文化のイニシエーションとジェンダーの関係に視野を広げたい。

### 参考文献

- ベッテルハイム、B. 一九七一年、「性の象徴的傷痕」せりか書房  
 福岡伸一 二〇〇八、『できそこないの男達』光文社  
 二本松市 二〇〇八、<http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/kanko/kohata/top.html>  
 オートナー、S. 一九七四、「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か?」、山崎カヲル編 一九八七、『男が文化で、女は自然か?』晶文社、所収  
 東和町教育委員会編 二〇〇一、『木幡の幡祭り記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財』東和町教育委員会  
 ターナー、V. 一九七六、『儀礼の過程』思索社  
 ファン・ヘネップ、A. 一九七七、『通過儀礼』弘文堂

(1) 長襦袢ではなくて、赤に意味があるのかもしれない。その場合、着物の形態ではなく、赤と女が結びつけられているのだろう。報告書によれば「現在、参加にあたっての衣裳は母親などが着た花模様襦袢か赤地の着物、または祭のために縫った襦袢風な着物で、主催者がそろえた白のたつつけ袴をはく。(中略) 権立がこのような女性の襦袢あるいは赤地の着物を着るのは、古くからの習わしかどうかは明らかでない(東和町・81)」としている。赤系統の着物とする伝承は多いが、白というところもあり、また赤い着物とするのは昭和三十年以降の新しい風習という説もあるようだ。由来は別にして、現在は女物を身につけることは慣習として確立しているといえる。

(2) 太刀は普通は体の左側に佩くものである。「権立」の「太刀」は左側に下げると報告書にも書いてあるが、実際にはビデオや報告書の写真を見てもんでんばらばらで、右に下げたり、果てはずれてしまつて腰の前に抱えている若者さえいる。これは「太刀」の構造に関係する。木の先を男根の亀頭様に削りだし、その反対側の根本に当たる部分に藁で編んだ鐙を付ける。そうすると亀頭からみて反対の端が太刀でいえば柄に当たることになる。太刀としてみると亀頭は本来は切つ先に当たり、腰に付けるときには体より後ろに位置する。ところが男根と考えると振り立てて前に来るのは亀頭である。この場合は太刀としては柄を後ろにして逆さまに佩くことになる。当事者も混乱して分からなくなつていたのではないだろうか。

(3) 現実には、試練とは無関係であることが分かる記述が報告書にある。それによれば、かつては権立一行と幡行列とは現在の権立が通る参道を共に進んでいたが、林道が整備されて尾根づたいの緩やかな道ができること

幡行列はそちらを進んだ。幡は倒さず立てて持つのが習わしで、昔の道は狭くて急なのでそれを避けたのである(東和町・40)。それどころか、苦難を経験すべき権立も新しい道を通つていたことがあるさうである。

(4) 注7参照。

(5) ビデオではこの「権立よばり」は一回だけが表現されている。それを見る限り、参加の「権立」全体に対してこの一回の問答がなされるかのような印象を受ける。しかし、かつては一人一人の実名を唱えていたさうである。「実名を告げるのが古例で、八幡太郎と告げるのは後になつてから(東和町・86)」であるようだ。また、「向山の木の根っこ」ではなく、「お千代」とか「お花」とか女性の名を告げたり、もっとふざけた名で問答したりということもあつたようだ。

(6) この参詣の前の乳粥をもらう段階での「百円硬貨」は理解が難しい。もちろん「百円」はいつでもよいことで、要するに「銭を渡す」ことの意味の理解である。ある世界からもう一つの世界へ通過してゆくとき、その境界を支配するものに銭を渡す習慣については、我々はすぐ「三途の川の渡し賃」を思い浮かべることができる。それに相当する意味であろうかといくらいしか私は思いつかない。二つの世界の移行において、いずれの方向においても渡し銭は必要とされるのである。しかし、この世界で生まれた子を養う役目の人を、三途の川の渡し守と同じに理解することも無理なようにも感じる。当事者である地域の人たちは「お賽銭」と呼ぶところもあるようだ。このお金を渡す風習は第二次大戦以前にはなかつたようである。終戦後の悪い時期に粥代として始まつたといふ説があるようだ。そうであるなら、深読みしすぎであつたかもしれない。(東和町・84) そうであるなら、深読みしすぎであつたかもしれない。土地の人の説が正しいなら、「百円」に意味があることになる。

(7) 共体的集団 (corporate group) としての若者組は、東和町教育委員会の報告書の限りではその存在は想定できない。しかし地区ごとの堂社(羽山籠り)にお籠もりをする宗教的施設。この語は現在は幡祭りに参加する組織を指すものとしても使われる。東和町・44。また、お籠もりのための堂社は、数戸から十数戸の家々がまとまって日常的結びつきの地域集団をなす「ヤシキ」単位にかつてはつくられていたという。同書・45。でのお籠もり(羽山籠り)の講において、参加者を年齢で区切って講を組織していることは参考になる。年齢階梯的な構造が窺われる。講は男のみの組織である。ある地域では四十一歳以上を「元老」、三十五歳より四十歳までを「中老」、三十四歳以下を「若連」としてそれぞれの役目を規定していたようだ。この講のお籠もりに初めて参加するものが「権立」である。これが「権立」の本来の意味のようだ。従って、この儀礼が若者組への加入礼であるのではなく、村の重要な精神的意味のある講に加入させられるが故に「胎内くぐり」などを経験させられるというべきなのであろう。